# 細胞の夢

## ―― 高群逸枝の恋愛論を読む ――

丹野さきら

This paper is an attempt to explore the implications we draw from reading of Itsue Takamure's essays on love. She, on the one hand, states that humankind vanishes through love, which has often been pointed out that it is derived from her nihilistic nature. On the other hand, she also insists that love has the end of mergers, and this view has been interpreted as a result of her symbiosis with Kenzo Hashimoto, her lifelong partner.

I would like to look at Takamure's metaphor of cellular fusion representing mergers. According to Takamure, the biological, symbolized by cellular fusion, is not destiny. The metaphor of cellular fusion reminds us of human beings as organic life and discloses our implicit assumptions on "biology-is-destiny" formulation. She notes that love and reproduction are independent and simultaneously closely connected each other, then love accompanied with reproduction will lead humankind to termination. This point of view is clearly contrast to general presupposition that species survival is guaranteed by reproduction.

Takamure's view on reproduction suggests that we need to highlight the conception of reproduction, which is created in the meaning-generating processes.

**キーワード：**恋愛、生殖、高群逸枝、種、ジェンダー

---

### はじめに――恋愛の経路、虚無の未来

「恋愛は個体の消滅の未来を約束」する（高群［1926］1967、p. 27）と高群逸枝は述べた。恋愛とは牽引、性の相牽く状態であり、「進化しつつ相離れぬ恍惚へ、永遠の酔へ、一体へ」（同 p. 150）の経路を辿っていく。一体へと進んでいく恋愛、高群自身の言葉に従えば「一体主義」、これがその恋愛論の骨子である。

> 一体主義は、恋愛の究極を、一体と見る。一体と感じた恋愛において、生殖し、人類における男女両性の一体化、男女両性の消滅期へまで、子孫を一体的過程の上において維持する本能。（同 p. 10）

高群が提示した恋愛論において、人はその存在の根拠を徐々にだが確実に奪いとられていく。一体主

義は、「科学上の地球の冷却説に順応して、人類の自然消滅を予想するものである」（同）。また、「恋愛も滅亡するのだし／人生も滅亡するのです」（高群［1925］1966、p. 87）というように、高群が執拗に消滅や滅亡に言及していることから、彼女の恋愛論はある時は滅びの美学と呼ばれ、またある時にはペシミズムという言葉で語られてきた。だが、そのような観点からは零れ落ちてしまう何かが「消滅を約束する恋愛」には胚胎している。その何かを掬い上げようとするなら、消滅を約束されている「個体」の、重層的な次元をまず整理してみる必要があるだろう。

高群が語る恋愛において、恋愛とは何かとの問いに「男女の一体化への希求」（高群［1931］1967、p. 287）と答え、それを、「渾然たる性的無差別もしくは超差別の境地を目がけるもの」（同）と言い換えていることと、二節でみるように高群が生命現象をプロセスとして、動いていくものとして把握していることとを撚り合わせると、恋愛によって確約される「個体の消滅」とは、二重の意味を帯びていると考えられる。第一に、男性、女性という性別観念をその身に深く刻印された存在としての個体の終焉を、第二に、自然とのあいだで新陳代謝を行う有機体としての個体の活動の終結つまり死を、である。一節で述べるように、これまでの研究[1]において高群の衰滅願望のようなものは、前提として位置づけられることが多かった。したがって、その衰滅願望の基盤や淵源が推察されることはあっても、高群の思考の流れのなかで、衰滅願望がどのように形を成していくかを跡づけようという作業が蓄積されてきたとは言いがたい。こうした作業を試みる一つの方法として、上述した二つの観点の区別をいったん前景化し、かつ両者を関連させながら高群の恋愛論[2]を読むならば、いったい何がみえてくるだろうか。それを探ることが本稿の主題である。

同時にこの探求は、高群の恋愛論を、恋愛と生殖の関係構造に着目して読むことを目指すことになる。こうした問題設定をより大きな文脈に位置づけるとすると、異性愛を立脚点として生殖という概念の再考を目指すもの、つまり異性愛システムに内在的な立場から、生殖を、意味が構築されていく場として顕在化しようとする試みであるということができる[3]。高群において、恋愛と生殖は別個の存在であるけれども、両者は不即不離のものであって、相ともなって人類を消滅へと導き行く。恋愛と生殖とのこうした相互連関は、ある意味で当然の、そして消滅へと至るという点を除けば保守的な図式に見えるかもしれない。けれども、消滅へと至るその道を踏査することで、恋愛と生殖の相互連関のラディカルな含意と、それがわれわれに投げかける問いを明らかにすることができるだろう。

## 1　消滅へのベクトル

詩集『東京は熱病にかかっている』のなかの一節には、高群の思想を貫いて走る太い「虚無への道」が姿を現している。

> 愛の本能の起源は、ある単体の分裂後の郷愁。
> 人類の進化の要素は、分裂せる相互が、単体への復帰の道程。
> 自然が与えた目的、我々の本能が我々に告げている目的は、種の進化にはなく、還元にある。
> 還元ゆえの進化。無から有、有から無。
> 虚空から物質、物質から虚空。
> 物質から虚無への道を、いまわれわれは行っているのだ。

地球の進化もそれを告げている。(高群［1921b］1966、p. 243)

生物も無生物も、虚無化への道を歩んでいる。「私どもが生きることは、矛盾でできている。その矛盾が、合理的に私どもを支配し、合理的に亡ぼすであろう」(高群［1926］1967、p. 77)。高群の著作の至るところに裸出している、消滅の予感ともいうべきこうした虚無へのベクトルに関しては、これまで様々なやり方で説明されてきた。

例えば堀場清子は、高群の世界観の特色として、女性解放思想の旗手としての果敢な前進性の内側に「〝衰滅感覚〟ともいうべき暗さを内包している」(堀場・鹿野 1977、p. 35) ことを指摘し、その理由の一つを「彼女が衰亡する家に人となったせいではないか」と推察する。別の箇所で高群の一体主義的恋愛論について述べる際にも堀場は、「幼時からの衰滅感覚が、ここに色濃く影をおとしている」(同 p. 147) とのコメントを付している。高群の亡びの信仰が、「男女両性の消滅期」をへて「人類の自然消滅を予想する」というような「暗い」志向を、幼年期からその思想に内包させたというのが堀場の基本的な見地である。

堀場がいわば個人史的観点から高群の思想の「暗さ」を説明しているとするなら、山下悦子は彼女に先行する諸思想の、高群的な発現を「空無の思想」として分析する。無から有、有から無へと無限の循環的生成論をもつ老荘思想、仏教的な絶対無の思想、これらが彼女の哲学の根源にあるという。そして高群のいう「人間の消滅」とは、人間中心主義に毒された存在としての「人間」の退却を意味し、その意味で山下にとって高群はフーコーと共鳴する思想家なのである (山下 1988)。

さてここまで二つの立場に代表させて、高群にみられる消滅へのベクトルに関する議論の、大まかな方向性を探ってみた。流れを整理すると、高群の恋愛観の土壌あるいは来歴を探し求める形で考察が進められてきた現状があることを指摘しうると思う。つまり、消滅を予見する高群の恋愛論にはそれを生み出す何か母胎のようなものがあって、それを詳らかにすることで高群の恋愛論の世界の様相がより明らかになる、という仮定に拠って議論が展開されてきた、ということである。したがってそこでは、まず虚無への祈りともいうべき高群の消滅へのベクトルが出発点となっていて、その一派生形として恋愛論も意味付与されるという手順を踏む。

高群の思想の由来を探ることは、高群読解のためには不可欠の作業だろう。それは、高群が生きたその時代に、言説の網の目のなかでせめぎ合いながらその思想がどのように構成されたかに常に留意しなければならないのと同様、肝要な主題である。

しかし、母胎としての高群哲学、その一分枝としての恋愛論、こうした順序で思考することは、「……私どもは、両性関係、ことにその上層的関係こそ、生殖を指導し、生殖を伴いつつ、ついに己れ自身の目的地に達する主格体であるとする」(高群［1926］1967、p. 178) というような高群の言葉を解釈するにあたってはあまり有用なやり方とは思われない。このくだりは、フロイト派の性欲昇華の原理の一般について述べたあと、レスター・ウォードを援用して両性関係と生殖との関係を高群が説明する部分である。ウォードのいう両性関係をこの箇所で高群は恋愛とほぼ同義語として用いており、両性関係は生殖に対して極めて副次的なものであるとするウォードに反論して両性関係の重要性を説き、ウォードのような見方を逆転させることがここでの高群の企図となっている。

われわれは、両性関係つまり恋愛が生殖を導いていくということを、字義通り素朴に読むことも許されよう。素朴に読むということは、「高群に消滅信仰ありき」という前提を廃すること、先行する諸研究

との関係においていえば、逆から読む、ということだ。いま仮にこれを逆向きの読解と呼ぶ。

この方向で「一体主義は人類の自然消滅を予想する」という高群の宣言を読むと、「一体化を理想とする恋愛」という地点から、「人類の自然消滅」の地平を見晴るかすことになる。高群のなかの消滅信仰ゆえに、恋愛において人間が一体化して終焉を迎える図式が導かれるのでなく、恋愛における一体化こそが、高群を読むわれわれをして消滅への道の第一歩を踏み出させるのである。

このような逆向きの読解の第一歩のために必要になるのは、高群の恋愛論において大きな特徴の一つをなす、生殖と恋愛の関係構造について、その内実を分析することである。その関係構造がもたらす帰結については、二節の主題となる。

恋愛が合体の本能であるならば、生殖は分裂の本能である。高群によれば、恋愛と生殖の関係については古くから様々に論じられてきたが、プラトニック・ラブのような恋愛の過度の神聖視、あるいは恋愛をもって生殖の道具視するといった偏重がみられるが、これらはすべて誤謬である。こと近時の科学思想は、「生殖至上の功利主義的思想」（高群［1931］1967、p. 285）に囚われている。その先駆者たるはショーペンハウアーであって、恋愛を生殖意志の詭計とする彼は「詭弁論者の最大な者」に他ならない。彼は、種族の意志が恋愛という妄想を組みたててやり、それによって都合のよい子を生ませようとするのだと論じているが、「ショーペンハウアーの恋愛論は、生殖意志にどこまでもこじつけて考えたものだけに、いたるところで破綻している」（高群［1926］1967、p. 174）。だから、「恋愛は空しい彩、種族がわらっている、と断定しているショーペンハウアーを、さらに自然はわらう」（同 p. 150）。高群からしてみれば、「その空しい彩こそ種族の未来であるということを知り、種族はそれに達するまでの手段として、子孫を維持する、盲目的な役目をつとめているにすぎないとわかれば、客観は『空』という気がする。『空』こそ実在であり、無意味こそ宇宙である」（同）。

しかしながら、このショーペンハウアーをはじめとして、ダーウィン、ウォード、エレン・ケイらによって、種族の永続という目的のもとに恋愛を徹底的に生殖に還元し、生殖を至上のものとする考え方が非常に勢力をもつに至っている。つまり一般的にいって、「説をなす多くのひとびとは、恋愛と生殖とを、結局おなじもの、または相ともなって種の永遠の増殖にむかって進むものとし、この二つを、相反し、相抑制し合う二つの別個の本能とはみない」（高群［1948］1967、p. 221）のである。

そして高群の見るかぎり、「根本的にこの説を覆した恋愛思想は、今日に至るまで見あたらない」（高群［1931］1967、p. 286）のであって、高群が目指すのはまさにその根本的な転覆である。「男女愛は『種族保存のためのものである。』という従来の思想にかたく反対」（同 p. 287）して打ち立てられた高群の恋愛思想のエッセンスは、

> 男女愛は「種族保存の形式による種族消滅への作用」に他ならない。（同）

という命題に集約される。この命題の導出過程を跡づけてみよう。

高群は、エレン・ケイに代表される生殖至上説の二大要素として、人類社会の不断の向上を信じる進化思想と、「種族を永く保存するための作用」という生殖観とを抽出し、それぞれにたいして異議を申立てる形で二つの仮説をたて、それを統合することで「男女愛＝種族保存の形式による種族消滅への作用」という命題を構築している。

すなわち、従来の進化思想にたいしては、「事物は限りなく進化しつつあるかのごとくである。だがそ

れは向上への秩序的段階を意味するものではなく、消滅への順次的運動にほかならない」（高群［1931］1967、p. 287）として、進歩向上にたいするその無根拠な信仰を切り崩す。また、「種族を永く保存するための」生殖に抗して、「生殖はそれ自らの中に『種族消滅への矛盾要素』をもっている」（同）という仮説を立て、生殖を根本と見なす説の基盤を揺るがそうとする。この後者の仮説に基づけば、生殖については次のようにいえることになる。

> 生殖現象なるものが明かに一つの機械的現象にしか過ぎないということ、すなわち子を生むということや生まないということには、本来何ら価値の相違はなく、すべては同じことだという無意味観に帰着する。（同）

つまり、通説における生殖至上主義とは裏腹に、実のところ生殖は何ら重要なものではなく単なる機械的現象であって、「盲目的に生むだけである」（高群［1926］1967、p. 27）。

このような立場から高群は、恋愛は生殖の奴隷などではなく、恋愛と生殖の関係は「そのいずれをも蔑視せず、また重視せず、道具視せず、両者を別個のものであると同時に、不離のものとして理解し、独立性とともに関係性をもたすべきである」（高群［1948］1967、p. 224）と考えるに至る。両者の相互関係について補足するならば、生殖と恋愛とは、「完全に二つのちがったもの」（高群［1926］1967、p. 181）で、「何ら恋愛至上意識も、肉欲至上意識もない。単なる二つの存在である」（同）ことが指摘でき、また、「恋愛なしには生殖は考えられない。生殖なしには恋愛は考えられない」（高群［1926］1967、p. 186）。つまり、両者のあいだには一方が他方の目的として君臨するというような関係性はなく、それぞれ違った機能をもつ別々の存在であり、かつ、分ちがたく結びついているのだ。したがって、次のようにいうことができる。「恋愛は、それ自ら目的を明らかに語っている。目的をかかげている。すなわち頭脳である。生殖意志は、単に盲目的に生むのみである。すなわち足である。頭脳の恋愛の目的をとげおうす地へまで、足の生殖は子を生むことによって辿っていく」（同 p. 151）。

それでは恋愛がかかげるその目的とは何かというと、「恋愛本能は……『合体』という目的をもって終始する」（高群［1926］1967、p. 33）と述べられているように、合体、そして一体化ということである。この「合体」が、細胞の融合というメタファで語られることは、恋愛と生殖の関係構造とともに、高群恋愛論において最も着目されるべき点となるが、それは次節の論点となる。

従来の恋愛思想を根本的に転覆しようとする高群の行論のなかで鍵となるのは、生殖を伴って達成されるであろう恋愛の目的なるものが、いかなる意味でも何らかの集団の永続を前提視するものではないということである。「男女愛は『種族保存のためのものである。』という従来の思想」とは全く対照的に、高群の恋愛の目的は恋愛そのものの中にある。恋愛そのものの目的のために進んで行くと、

> 恋愛はあくまでも実体的に合体せねばならない未来をもっているから、恋愛の過程が進化するところまで進化してしまい、行けるところまで行ってしまうと、男女両性の肉体的相違は、しだいに取りのぞかれ、ついに原始生物のごとき、男性でもなく女性でもないあるものになってしまう。（同 p. 33）

つまり、合体の極致へと近づくにつれ、男女両性の相違はしだいに消失していき、次いで「人類の消

滅期」が訪れる。「生きる意志ということを盲目的に信じた時代は過ぎ去らねばならない。いま我々は人類の絶頂期に達した。かなたの地平線には、すでに我らの墓場（自然消滅の）が見えている」（同 p. 178）。

こうして、「一体化を目指す恋愛」によって、われわれは「人類の消滅期」へと立ち至ることになるのだが、このとき、「消滅」ということに、詩的で美しい終末像を重ねるべきではないだろう。高群が語る「消滅」には、黙示録的な哀切の響きはない。それは『放浪者の詩』にみえる一節、「人類は自然で偶然なのだ／だから　みんな偶然で自然なのだ／そしてお終いは滅亡なのだ」（高群［1925］1966、p. 87）に続く、「だが　その滅亡を／なぜ悲しまねばならないというのかね（同）」というフレーズを決して無視することはできないし、また、「破滅は破滅ではない」（高群［1921b］1966、p. 286）からである。高群は「消滅」に付与されてきた、負に偏ったイメージをいとも簡単に相対化してみせるが、それが可能になるのは、「消滅」が、死や有限性にたいする絶望に裏打ちされたものとして据え置かれてはいないからである。結論部で述べるように、高群は「消滅」を語ることで、永遠性という妄想を打ち砕くための展望を切り拓こうとしていた。

消滅へと至るプロセスをより詳細にみていくために、彼女が「細胞の夢」のなかでみた一体化のメタファの諸相を探ってみよう。

## 2　一体化というメタファ

恋愛とは「男女の一体化への希求」であると高群はいった。このような高群の一体化願望は、高群の生涯のパートナーであった橋本憲三との関係性の写像として提示されてきた経緯がある。ときには「『恋愛論』『恋愛創生』とは、まさしくともに生きる愛によって結晶された世界である。ともに生きる、この一体化への願望、合体願望を内なる本能としてとり込み〈対なるエロス〉を完成させる。それは現代にあっては見果てぬ夢にすぎないのであろうか」（寺田 1983、p. 217）と、賞揚と嘆息とともに、またあるときは橋本との対関係においては果たし得なかった一体化の夢の言説的飛翔として、多少の苦々しさとともに（山下 1988）。最近では栗原葉子が、橋本の側に焦点をあてて〈対〉のありようを照らし出そうとしている。高群と橋本、この二人を「稀有な」とか「かけがえのない」という言葉で説明してこと足れりとする傾向に栗原は異議を唱え、「『男女平等』や『男女共生』といった、蒸溜水のような味気ないものではなく、人類の男と女の『性』がもつ、互いの自浄力といったもの」（栗原 2000、p. 18）を析出してみせる。

いずれにせよ、橋本との関係性を原点として高群の恋愛論を読むならば、その関係性の直接の一表現形態として、あるいはその関係性においては果たされなかった夢の具現形態として、このどちらかもしくはこの二点によって定められた範囲内で解釈されることになる。しかし、高群の恋愛論は、高群と橋本という〈対〉のありようが育んだ果実として位置づけ、読むというやり方以外の可能性を拒否しているわけではないだろう。出発点として恋愛論を読むことは、そこから〈対〉を逆照するという、本稿とは別の作業のための準備としての意味をももつはずだ。

さてこのような観点から高群の恋愛論を読む場合に導きの糸となるのは、一体化のメタファが細胞の融合にたくして語られているということに視線を凝らし、そのことの意味を考究することである。

一節で議論したように、一体化とは、恋愛が目的とするところのものであり、「恋愛は『一体』という

願望と、信念とで成り立つ。よりいっそう一体へ、と恋愛は進化していく」（高群［1926］1967、p. 150）ものである。恋愛を徹底的に種族という全体性へと回収するケイの恋愛論ときっぱりと袂を分った高群が提示する恋愛の様態は、次のようなものである。

> 恋愛意志は彼と彼女とに「一体」になろうとする強烈な意欲をおこさしめて、目的を果たそうとする。が、そう早く一体になりうるものではない。一瞬間の一体から破綻へ、破綻からさらにいっそう進んだ一体へ、また幻滅へと、恋愛意志の神さまによって、たえず引きまわされている。それを進化と名づけている。（同 p. 27）

では一体化の内実はどのようなものか。それは「一体とは文字どおり一体である。一体を完全に申し分なき形において実現しているのは細胞である」（高群［1926］1967、p. 181）。なぜなら、「胚種細胞に対する精子細胞の恋愛は、見事に一体になり切り、一体になり切ったところで生殖している」（同）からである。

つまり、高群が恋愛の理想として掲げた「一体化」とは、生命体と生命体との文字通りの合体、融合を意味するものであり、人間がもし一体化を成しうるとするならば、それは「手と手をまぜあい、内臓を一つにし、二つの頭を割って、ある一つの頭をつくりあげる」（同 p. 33）というような様相を呈するはずだ。だが少なくとも現在のところ人間には、細胞のような合体は不可能である。したがって、一体化という理想に向けて人間は少しずつ歩いていかなければならない。「最初は単純に、しだいに複雑に、精神の奥深いところで抱合」（同 p. 181）し、そして、

> われらには肉体で抱合したばかりでは一体という気がしない。そこで、この精神の密かな部分で抱合した一体において生殖し、順次に、いっそう密度を加えつつゆく一体的過程において生殖することによって最後の一体へ、すなわち細胞の一体と同質を意味する一体へ近づいてゆくのである。（男女両性の消滅へ）（同）

一体化を十全に果たしうる存在として高群が細胞を語ることから、われわれは何を想起するべきだろうか。

例えば河野信子のように、厳然として存在する生物学的宿命にたいする高群なりの解釈として読むこともできる。「人間は生物存在の本源的なものから逃れることはできない。……自然存在としての人間は合体と分裂の二方向を本質存在の内部にもち、本源的にすぎぬものであってさえこの二重存在であることから出発している。単細胞生物はこの原基形態であって、複雑な細胞の働きをもつ人間もまたこの二重存在の法則に支配される。……合体と分裂（恋愛と生殖）は逆方向の作用であるにも関わらず、生物体はこの両者を個体のなかで凝縮して表現していかねばならない。そこに自然界の残酷さとやさしさがある」（河野 1977、p. 154-155）。合体と分裂という、全生物を貫く二重存在の法則から逃れる道はない。

高群が語る細胞のメタファのもつ意味をこのように解読する河野は、一体化については、「個体をとらえ、個体にとって夢とも幻とも追いもとめられる頂点に、類としての寂滅をよぶ凄絶な美の構図がある。個体の内部に巣食う悪意の増殖の結果としてではなく、その美質の極点において、終りのときはつげら

れる。わたくしはこれほど美しい終末像にいきあったことはない」(同 p. 213-214)と、美質という枠組みに回収する。

しかしここでわれわれには一つの疑問が生じる。細胞の接合に向けられた高群のまなざしは、人間の生物学的条件にたいする悲憤、あるいは始原へのノスタルジックな回帰の希求に彩られたものであろうか。そうは思われない。「われらは順次に細胞の一体と同質を意味する一体へと近づいてゆく」という言葉がわれわれに要求する諸解釈の可能性を追求するためには、細胞の融合という形で提示される一体化のメタファにおいて、生物学的なるものをめぐる高群の観念がどのように作用しているのかを、慎重に見定めておかなければならない。

細胞の一体化に関する先の引用部分からは、二つのイメージが細胞のなかに重層的にたたみ込まれていることが推察される。つまり、原初の生命体としての姿と、一体化という恋愛の目的が果たされるときのわれわれの存在様態とである。高群が語る一体化のメタファのなかで交錯するこの二つのイメージは、生命存在としての人間にたいする彼女のまなざしの内実を解き明かす手がかりを与えてくれるものだ。高群は生命をどのように認識し、進化をどのような現象と見なしていたのだろうか。

高群にとって「恋愛現象は人間社会におけるのみの特殊的現象ではない」(高群［1931］1967、p. 283)。そして「恋愛の起原は、遠い一般生物のなかにあるだろう。厳密には、初期古生代の植虫や、花形頭や、三葉虫のなかに」(高群［1948］1967、p. 219) と述べ、「原始生殖体に、両性というものができたという点に、恋愛本能の鮮明な表現をみいだす」(同 p. 33) というように構成されていくその論理は、原初の細胞とわれわれ人間存在との連続性ということへの、明示されないながらも鋭敏な意識をうかがわせる。このことはおそらく、高群の視線が注がれていたのが、生物の「動き」としての側面であったという事実と、深く関連するだろう。

> 生物の目的は、繁殖でも保存でもない。それは近視眼的見方である。厳密には生物は目的をもたない。ただ過程のみをもっている。ただ機械的に、ただ動いて行くだけ。(高群［1926］1967、p. 35)

高群が語る生物は、動いていくそのプロセスの途上の、瞬間ごとの断面図のようなものとして存在する。「動き」のなかで象られる一存在として、細胞と人間を差異化するための絶対的な区分線は、高群においては存在しないといってよいだろう。この「過程としての生物」というビジョンは、一節でも触れた高群の進化観と照合させれば、より明確に見えてくる。高群はまず「進化とは何か」と考え、「従来いわれているそれは、唯心的なると唯物的なるとを問わず、事物のたえまなき向上を意味している。向上？果たしてそうであるか。事物は向上しつつあるか。もしあるとしても向上とは何か。誰が、何を標準として、向上、向下なる判断を下すのであるか」(高群［1926］1967、p. 287) と、問いを重ねていく。そしていったんは「―徹頭徹尾それは主観の範囲を出ないものではないか。この際、われわれが最も厳密ならんとせば不可知論をとるほかはない」(同) と結論を下すのであるが、しかし、進化とは「向上のためでなく事物の消滅を目がける機械的運動」と定義し直す。

人類の不断の向上という信念にたいして深い懐疑のまなざしを向ける高群が「進化」という言葉を使うとき、それは、「消滅への合理的進路」を意味していたということは、つねに留意されるべきであろう。その場合、物事がかち合いながら消滅へと進んで行く、その様相が指し示されているのだ。そのこ

とは、「詩人汝に告げん。／私の哲学は進化論。／ただし、より善き進化でもなく、より悪き進化でもない。／心的進化、これ単なる必然。そは空化への物的進化。」（高群［1921b］1966、p. 212）という宣告にも明瞭に現れている。

「恋愛は、動きそのもので、実体的に結合する未来を志している」（高群［1926］1967、p. 33）という高群の恋愛観は、動き、過程として存在を捉える彼女の生命認識と呼応させるとき、その意義が明確になるだろう。またそれは、高群を取り巻いていた種族の向上・進歩へと収斂する恋愛論[4]から、はるかに隔たった場所にあったのである。

さてここでのわれわれの目的は、細胞の融合という形で提示された一体化のメタファにおいて、生物学的なるものをめぐる高群の思念の作用形態がいかなるものであるかを明かにすることであった。生物学的なるもの、ということの内実は、過程として生命現象を捉え、目的論的な進化を無意味化する、そうした高群の認識だということができる[5]。その認識は、一体化のメタファとして高群に細胞の融合を語らせることを可能にする。なぜならそうした視座において、人間とそれ以外の生物とのあいだの区分線はその固有の存在意義を主張することをもはややめているし、細胞から人間に至る不可逆的で単線的な歴史像や、人間を頂点とする階層的な生物相関図は棄却されているからだ。

人間／動物という二分法さえ飛び越えて、高群は細胞へとまなざしを向ける。細胞の融合に言及することで高群は、生物学的なるものへの視座を、人間存在に課せられた桎梏としてでなく、むしろ生物学的条件を桎梏として意識化してしまう価値観を破砕する可能性として解釈する一つの道筋を、指し示してみせたのだ。そして、このことによって、一体化のメタファの射程範囲はラディカルに拡張されることになる。それを分析するために、「細胞の融合」のメタファを、序論部で仮定的に区別しておいた「個体」の二つの次元に照応させてみよう。すなわち、一体化のメタファが細胞の融合という形象で提示されたことについて、男性、女性という性別観念をその身に深く刻印された存在としての個体と、自然とのあいだで新陳代謝する有機体としての個体というそれぞれの次元において、どのような意味づけをすることができるだろうか。

一体化の行き着く先として高群が見据えたのは、「恋愛はあくまでも実体的に合体せねばならない未来をもっているから、恋愛の過程が進化するところまで進化してしまい、行けるところまで行ってしまうと、男女両性の肉体的相違は、しだいに取りのぞかれ、ついに原始生物のごとき、男性でもなく女性でもないあるものになってしまう」（高群［1926］1967、p. 33）、そのような位相である。

「男性でもない女性でもない」あるもの、それは序論で述べた「個体の消滅」の第一の観点に対応する。つまり、いま知られているような性別観念をその身に深く刻印された存在としての個体、その終焉を、「男性でもない女性でもない」あるものは示唆している。一体化を目指して「……恋愛の進化が深まり、高まるにしたがい、男女両性の精神的な、肉体的な相違もが、しだいにとりのぞかれてゆき」（高群［1948］1967、p. 229）、男／女の再生産という直線的なルートはしだいに融解していく。さらには、男女両性を「原始生殖体のような、男でも、また女でもない『無性』―もしくはプラトンの『アンドロギュノス』（両性人）にまで還元する未来」（同）が予期される。

細胞に可能でわれわれには不可能なこと、つまり「手と手をまぜ合い、内臓を一つにし、二つの頭を割って、ある一つの頭を作り上げるというようなこと」（高群［1926］1967、p. 33）、それをあくまでも希求して、「原始生殖体」のようなありようが獲得されようとするとき、存在は、性別観念を刻み込まれた個体という範疇には包摂されなくなる。つねに男／女として個体を名指してきた思考枠組みでは、そ

れを認識する術をもちえないだろう。細胞の融合というメタファで示された一体化は、このように、われわれが見慣れている性別分割という実践の永続性を阻止するものである。

個体の消滅の第一の観点から第二の観点にうつろう。つまり、細胞の融合のメタファにおいて、有機体としての個体はいかなる意味を帯びているのか。

細胞の融合という形の一体化は、生殖をめぐる意味機構を問わざるをえない局面にわれわれを導いていく。なぜなら、一体化を目指して進んでいき人類を消滅に導く恋愛は、生殖を随伴しているからである。生殖なしではこの目的は果たされない。だから、高群の「消滅を約束する恋愛」の含意がより先鋭になるのは、恋愛と生殖の関係構造という地平においてであり、逆にいえば、恋愛との相関項として生殖を問わないかぎり、「消滅を約束する恋愛」が内包する意味を把捉しそこなう恐れがあるということだ。

先に述べたように、細胞のメタファから読み取りうるのは、生物学的条件を桎梏として意識化してしまう価値観にたいする高群の疑義であった。最たる生物学的与件と見なされている生殖も、もちろん例外ではない。一節後半の論点を振り返っておこう。高群によれば「生殖はそれ自らの中に『種族消滅への矛盾要素』をもっている」（高群［1931］1967、p. 287）。これは、広く流布しているように思われる、種の保存と結合させられた生殖観念[6]とは相容れないものである。

我々がいうところの生殖の意味は、再生産秩序における「種の保存」を絶対的な準拠点として組みたてられ、たとえ性と生殖の乖離が了解されようとも、生殖そのものの意味機構は温存されていく。だが、個体間の生殖という営みが、遺伝的隔離集団としての種というカテゴリーの存続もしくは繁殖に貢献しうるというのは、あくまで想定可能な諸結果のうちの一つであって、有機体に与えられる超越的な前提条件ではありえない。個人の行為とそこに付与される意味や価値とを問題にするとき、その根拠あるいは目的を仮想集団の保持の次元に求めることは、生物学への逃避であり、結局は考察の放棄、問題の先送りになってしまう。かりに生物学の領域で「種のための生殖」と語られるとして、それはある意味で解釈の一様態であるということを常に念頭においておく必要がある。リチャード・ドーキンス（Richard Dawkins）の言葉をかりるならそれは「目的というメタファー」（Dawkins 1982, p. 91）なのであって、実際に生殖が種のために存在する、という目的論の形で記述することの許可をわれわれに与えてくれるわけではない。

高群が、恋愛とそれと不即不離の生殖によって人類は自然消滅すなわち墓場への道を辿るというとき、その恋愛の意味内容は、種族保存へと収斂される恋愛のそれとは鋭く逆立するものとなっている。男女愛は「種族保存の形式による種族消滅への作用」なのである。このような「種の保存」と「種の消滅」との、一見奇妙で不可思議な逆転こそが、高群の恋愛論が、生殖をめぐる我々の認識装置に問いをつきつける地点となる。つまりここから、恋愛との関係構造の内部で、人間に課せられた桎梏としてではない生殖の意味が彫塑されていく道が拓かれていくのである。

差異化の実践としてジェンダーを捉える現在の枠組みにおいて、もはや恋愛は生殖へと奉仕するものとしては位置づけられていないと総括することは、あるいは可能だろう。だが、留意しなければならないのは、生殖＝再生産につながる恋愛という軸を考察から外してはならないということである。なぜなら、生殖につながる恋愛と生殖につながらない恋愛とを弁別し、後者を前景化することによって前者が話題から消え去っていくことになれば、結局は生殖に付与されてきた生物学的必然性を問う契機は失われてしまうからだ。生殖につながる恋愛を自明視あるいは逆に遺物として放逐して生殖から遊離した恋

愛に照準することは、恋愛を語るそのやり方の自由度を増大させるのは事実としても、恋愛を弁別する基盤としての生殖の絶対性を永らえさせるという、厄介な事態を招くことにもなる。つまり、生殖を目的としない恋愛、生殖から自由な恋愛、そういった切り口で恋愛を論じることは、結局は生殖を核として、生殖のまわりに、恋愛にまつわる観念群を組織してしまうことになるのだ。生殖からの離床を志向することで、生殖の至上性を強化してしまう構図がここに存在する[7]。

このことは、恋愛は目的論的にであれ結果論的にであれ生殖へと結びつけられ、その生殖は人間の再生産すなわち種族保存へとつながり、それに寄与するものとして生物学的に定式化されていると認識されている、というように現状を記述する目論見に加担することになるかもしれない。「恋愛は生殖のために存在する」という言説の形をとらないぶん、そこで生物学的与件として機能している生殖は、より巧妙に不可視化されている。したがって、もちろん恋愛と生殖の乖離ということはこれまでに様々な視点から論及されてきたけれども、そのなかで、次のような問いを発することは有意味であろう、すなわち生殖を生物学的領域に投げ込まずに議論の対象として主題化する方策は、確立されてきたといえるだろうか、と。議論の標的となるべきは、生殖につながる／生殖につながらないという弁別の機構そのものなのであり、高群にならって生殖につながる恋愛を保持することによって、われわれには、生殖の宿命性を問題にするための一つの手がかりが与えられることになる。

生殖が恋愛と結びついてその意味が高群の手によって構成されるとき、それは消滅への道を歩むプロセスとして現前する。そのことは、われわれが「種の保存」という枠の中で恋愛を語っているという局面が、生殖については語らないという姿勢のなかで不可視化されていることを、裏側から照らし出す。

高群の言葉は、恋愛と生殖を分離させた後で再び結合することで、生殖を与件として放置していてよいという理由などないことをわれわれに主張するものだ。生殖は裸の真実なのではなく、意味がつくりあげられていく場の名前なのである。恋愛と生殖は別個のものではあるが密接に関連しているのであり、「盲目的に生む生殖意志を、よい具合に調節しつつ、ついに自らの目的地へ導こうとはかっているのが恋愛意志である」（高群［1926］1967、p. 27）。

この二つの意志は分ちがたく結びついてはいるが、「相反し、相抑制し合う」（高群[1948]1967、p. 221）ものなので、「相互に作用し合うことによって、恋愛は自己の意志―男女愛の究極は子孫を生むことでなく、それの終ることであることを表示するのに対し、性欲はそれと反対に抜かりなく生まんと覗う」（高群［1931］1967、p. 288）というように、両者の間にはいわば「戦い」がある。しかしながら、「生殖意志のみであるようにさえみえる原始生物から、しだいに恋愛意志が顕著となり、恋愛意志が生殖意志を左右するようになってくる高等生物にいたるまでの過程」（高群［1948］1967、p. 221）を指摘することができるので、恋愛と生殖という目的を異にする戦いにおいては、「最後まで性欲は自己の意志を弱めつつも遂行するが、その矢尽きた瞬間に、同じく最後まで自己を表示しつづけた恋愛が登場して、人類の挽歌を歌う」（高群［1931］1967、p. 288）[8] という結末を迎えることとなる。

こうして人類は消滅する。一節でも引用したように、高群が「両性関係、ことにその上層的関係こそ、生殖を指導し、生殖を伴いつつ、ついに己れ自身の目的地に達する主格体であるとする」（高群［1926］1967、p. 178）と述べたことの意味が、ここにきて明解に了解されたといえるだろう。

高群が定式化した恋愛と生殖の関係構造においては、有機体の営為としての生殖は脱自然化され、つねに恋愛からの実質的な影響力を被るようなものとして存在する。彼女が描いた経路では、しだいに恋愛が顕著となっていき生殖が減衰していくことになる。序論部で述べた二つの次元の「個体の消滅」の

うち、有機体としての個体の活動の終結つまり死が、高群の恋愛論の圏域には包含されていることの意味とは、このようなものであった。

これまでの流れを整理しておこう。一体化のメタファが細胞の融合という形で具現させられているということは、生物学的なるものを人間存在にたいする桎梏として意識してしまうような価値観を破砕する可能性に満ちたものである。細胞の融合は、性別の二分法の溶融にたいしてリアリティをもって想像をめぐらすことを可能にし、さらには、宿命としての生殖という硬直した意味内容を組みかえる方向を明示する。言いかえれば、細胞の融合を理想として掲げ恋愛が進んでいく途上で、男／女の性別観念に浸された個体の消滅だけでなく、生殖によって再生産されていくはずだった個体の消滅も確約されていることが見えてくるのである。

高群がうちだした「個体の消滅の未来を約束する恋愛」とは、以上のように、恋愛と生殖という関係構造に、結合のための分節をもたらし、恋愛に主導権を渡すことによって生殖に働きかけ、そのシニフィエを変容させる一つの概念装置である。高群においては、「生物が消滅することなく、限りなく進化するものであるという説を採るならば」（同 p. 33）という語り口に象徴されるように、生殖によって保証される生物の限りない進歩・向上という価値観は、仮定法のなかにしか存在しないものであった。

## おわりに――溶解する「個体」、途絶する再生産

消滅すること、無に至ることにこれまで我々が付与してきた負の観念にたいして、彼女は問う、なぜ悲しまなければならないのかと。種族の向上•進化は実は消滅の第一歩であって、「神さまは、進化や向上という主観を与えて、人を理知的に酔わせて下さ」（高群［1926］1967、p. 27）っているのだ。だが高群はそれに甘んじることはない。

なぜわれわれの宗教は
永遠の生命にその基礎を置き
なぜわれわれはまた
その妄想にすがらねばならないのだろう
うそだ
われわれは欺されない
だからわれわれの宗教は
瞬間の生命にその基礎を置く（高群［1921a］1966、p. 71）

高群が生きる「瞬間の生命」とは、二節で述べたように、動き、過程としての生物、その途上の一瞬一瞬の形象として把捉されたものである。それは「永遠の生命」という妄想に徹底的に懐疑のまなざしを向けることで編み出されたものだった。

一節の主題であった「消滅へのベクトル」も、「永遠の生命」という妄想からの離脱を目指す思想の、一つの表現形式である。高群は「われわれ人類の永遠を封鎖し貫徹する真理」（高群［1925］1966、p. 95）を求めていた。「消滅」がネガティヴな意味を帯びているばかりではないのは、高群において、妄想としての永遠性を積極的に否定するための確固とした足場として、「消滅」という観念が定立されていたから

でもある。「人類の自然消滅」が後年の著作（高群［1948］1967）では「人類の寂滅（もしくはさらに他の新生命への発展）」というように表現されているのは、マルクス主義への接近によって高群の世界観が明るくなったことの現れ（鹿野・堀場 1977）というよりも、「消滅」に纏わりつくペシミスティックなイメージが、永遠性という妄想のなせるわざであると、高群が確信していたことの証左ではないだろうか。

恋愛も生命も、永遠性、全体性へと繋ぎとめられ、それに奉仕するものとして語られてしまう。けれども、

> 心は「ため」からできたのではなかろう。
> 体も「ため」からできたのではなかろう。
> 心の起原は、
> 昔、瓦斯体のできた動機、偶然の必然。
> 体の起原は、
> 昔、動機の作った瓦斯体。
> その無意味な必然。（高群［1921b］1966、p. 234）

「心」も「体」も、何らかの外在的な目的のために生まれたわけでもないし、目的によって手段化されることでその存在意義を見出されるべきでもない。恋愛も生殖も、それ自体として存在するのだから、「恋愛の示す両性の一体化への渇望においても、それ独自の至純性が生かされなければならない」（高群［1948］1967、p. 224）。一体化を目指す恋愛は、「種族のために」という標語のもとに、種という永遠性、全体性へと括られて、そうして目的のために手段として意味づけられるのを断固として拒否するものである[9]。「物には、すべて、その存在とその性質があって、それによっておのおの生きている」（高群［1926］1967、p. 181）のだから、それ自体を「あるがままに解釈すべき」（高群［1931］1967、p. 287）なのだ。

このことを注視しつつ、男女の一体化への欲求、すなわち恋愛は「渾然たる性的無差別もしくは超差別の境地」（高群［1931］1967、p. 287）へ至るという高群の言葉から、われわれは何を読み取りうるだろうか。それが本稿を終えるにあたっての問いである。

高群が臨んだ「渾然たる性的無差別もしくは超差別の境地」には、二分法のなかの「男」も「女」も、生殖によって永続を担保される「種族」も存在しない。そして「種族」という名の永遠性のための人間の再生産も、行われてはいない。われわれがよく見知ったものは多く失われているだろう。

つまり、恋愛が行けるところまで行ってしまうと原始生物のような男性でもなく女性でもないあるものになり、また、恋愛は生殖と相ともなって人類を消滅へと導いていく、そして虚無化への道を辿るという高群の恋愛論において、「性的無差別」、「超差別」とは、種という全体性に奉仕する生殖のために組織され固着した両性間の差異の連なりが溶解し、意味を失った状態のことであるといえるだろう。

生殖は、あるいは女性の抑圧の根源と見なされ、異性愛制度を通して男女の二元化を作動させる機構と位置づけられ、ときには女性性賛美の基盤として称揚されてきた。そして近年は生殖技術の進展により、生殖そして身体はこれまでの枠組みを根本的に変革しなければ論じえぬものとなった。しかしながら、ジェンダー、すなわち「差異化という実践」（上野 2002）について議論が深化し、身体という究極

的な生物学的条件とみえるものでさえもつくられるものであり、いかなる意味でも特権化は許されないことが了解されてなお、ジェンダーと生殖との関係構造については、未踏の領域が待ち構えている。

高群自身は、生殖によって、生殖という目的のために固定された差異の連鎖が解きほぐされた存在のイメージを、アンドロギュノスの姿態に結晶させた。それが実現される場所は、いかなる意味でも理想郷などではない。高群の未来展望は、徹頭徹尾現実主義に基づいていた。「行こうか。それは寂寞たる方向へである。そこが楽園であるという幻想や、ロマンティックなあこがれは私にはない」（高群[1921b] 1966、p. 220）。両性関係を、恋愛を極限まで追究することによって、高群は「渾然たる性的無差別もしくは超差別の境地」を、確かに予見していたのだ。

それを継ぎ、道標とし、そしてそれを超えて、ジェンダーと生殖、種とジェンダー、種と生殖をめぐる自明性を掘り崩す可能性を模索すること、これこそが高群の恋愛論を読む者に示された課題である[10]。

（たんの・さきら／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程）

掲載決定日：2003（平成15）年12月 8 日

## 注

1　高群逸枝（1894―1964）という人間とその思想について、これまで多くのことが語られてきた。詩人・アナーキスト・女性史研究家といわれる高群の思索領野の広さと深さに比例するかのように、高群研究の蓄積は膨大である。いま仮に分類を試みるならば、高群の歴史学的業績の批判的継承を目指す流れ、その思想に息づく女性解放の思想を様々な角度から照射しようとする流れ、彼女自身の〈対〉としての生き様と交錯させる形で恋愛論を読み解こうとする流れ、といったように大別できよう。これらの潮流はむろん相互に関連している。

2　高群の恋愛論という場合には、通常は前半生の主著である『恋愛創生』（1926）とその類書である『恋愛論』（1948）を指すことが多い。本稿では『恋愛創生』と同じく『高群逸枝全集第七巻』に収められた評論「恋愛と性欲」、そして全詩集を収録した『全集第八巻』もテキストとして用いた。高群の思想体系の全体を理解することよりも、「消滅を約束する恋愛」というテーゼから今日われわれが読み取りうるものを明らかにすることを目指したい。

なお『恋愛創生』は、そこで提唱した新女性主義によって高群を女性解放の思想家として起たせた書物として位置づけられている（例えば西川 1997）。新女性主義は、「『恋愛の自由』の基礎の上に立つ結婚制度の廃止、『教育の自由』の基礎の上に立つ、社会教育制度の廃止を、母性愛の立場に提唱する」（高群［1926］1967、p. 118-119）。

3　本稿の問題関心とは別の角度から生殖を問うものとして参照されるのは、例えば異性愛主義の相対化という論点（竹村 2003）や、有機的統一体としての身体をサイバネティックな身体として再創造するという道筋（Haraway 1991）である。

竹村和子が『女性学事典』の「異性愛主義」の項で提示するのは、「異性愛を絶対化せず、多様な性の交換が認められれば、その性の交換を成立させている人間の解剖学的性差の弁別要素は希薄になり、性差別あるいは性的差異そのものが解体される」という展望である。また、生殖はもはや個人的で有機的な身体の力を表すしるしではなくなったと喝破するダナ・ハラウェイ（Donna Haraway）を先導として、生殖が包含してきた自然主義の残存物を徹底的に払拭してしまうという方向性もある。

本文でも述べたように、恋愛と生殖の分離が可能であるからこそ、あえて異性愛（恋愛）を立脚点として生殖を読み解くことが、ここでの目的である。ちなみに高群のいう「恋愛」はその用法にしたがって異性愛と同義とし、高群の同性愛にたいする姿勢は問わないことにする。

4　『恋愛創生』が書かれた1920年代の恋愛論の見取り図としては、加藤秀一の論考を参照した（加藤 1997）。

5　高群のこうした生命認識は、真木悠介が細胞の共生進化についての理論をひきながら描いてみせた、共生系としての個体の様相を想起させる。異質の細菌が寄り集まって細胞になり、それが多細胞化してつくられる形のヴァリエイションのひとつとして、人間の個体という存在様式がある。

この数千年来、とりわけ最近の数百年の間、われわれの「自我」の絶対性という傲慢な不幸な美しい幻想を自分じしんの上に折り返して増殖させることとなるこの身体的個という位相は、われわれの実体であるこの重層し連環する共生系の一つの中間的な有期の集住層なのである（真木 1993、p. 73）。

6　この言い方は正確さに欠けるかもしれない。後にも述べるように、われわれは生殖を種という観点からしか価値づける術を知らない、というわけではない。種について語られないことが、結果的に「種のための生殖」の自明性を強化しつつ存続させてしまうことになるのだ。このことは後に検討する、恋愛と生殖との結合が後景に撤退させられることによって逆説的に保存される生殖の宿命性ということと、パラレルな事態であるように思われる。恋愛、生殖、種、これらの錯綜した関係性を考えていくことは今後の課題である。

7　「生殖の至上性の強化」の一例は、吉澤夏子の議論に見出される。吉澤は「私たちは今、『純粋な関係性』を基盤にした『出会いの愛』を男女ともに志向し、生殖という必要性から解放されたセクシュアリティの在り方を模索していかなければならなくなった」（吉澤 1997、p. 52-53）と述べる。そしてこの「純粋な関係性」を基盤にして形成される、高度に選択的な関係性としての家族の中核に子どもが存在することによって、家族は「高度の選択性」と「運命の呪縛」という二つの方向性が交錯する場となるという。子どもの存在は「運命の呪縛」であると意味づけることは生殖の自明視であるという点が本稿の文脈からして肝要なのではない。「純粋な関係性」という、その関係のためにのみ切り結ばれる、高度に選択的な関係性との対比で生殖の項が提示されることによって、その与件性がより強められることになるという点が、「生殖の至上性の強化」の最たるものなのである。

もう一つ「生殖の至上性の強化」ということの例を挙げるならば、リン・マーグリス（Lynn Margulis）が鮮やかに提示する「性と生殖の無関係性」を参照する際に生じると予想される陥穽が考えられる。性（遺伝物質の合体）と生殖（新個体の創造）の不可分性しか知らない我々にとって、両者が歴史のある時点で結合した、本来は全く関係のない現象であることを実感するのは困難である。だがこのマーグリスの論そのものは、性と生殖の分離ということについて、異性愛主義への批判とはまた別の観点から、つまり生命の歴史という立場から探査していくひとつの可能性を示している。生殖と性とは本来的に結びついているのではないし、生殖に関係のない多様な性現象をわれわれは享受している、さらに、生命の歴史のある時点までは性と生殖は別個の現象だったというではないか、というように論をすすめることができるのだ。しかしこの際、切り離された性の方にばかり力点をおくことは、生殖の自明視という罠に落ちる危険と常に隣り合わせである。だから、もし我々が田崎英明にならって「生殖と性とが本質的には無関係であるとすると、生物にとって性とは何なのだろうか」（田崎 2000、p. 45）と問いかけるならば、急いで次のような問いを付け加えなければなないだろう、マーグリスによれば「生殖は生物学的には一つの至上命令である」ようだが、新個体の創造という生殖に関しては、性と分離されることによって何が見えてくるのだろうか、と。

8　高群のテキストのなかの性欲という語には大きな振幅がある。高群自身の定義としては、性欲は、恋愛という性の相牽く状態、「牽引の次の瞬間における結合の内部を意味するもの」（高群［1931］1967、p. 284）である。生殖に伴われる知覚として性欲が位置づけられる箇所も見られるが（高群［1926］1967、p. 179）「性欲（生殖）」というように同義語として扱っているケースもあること（高群［1948］1967）、恋愛と性欲と相伴って消滅への経路を進むと述べられていることとを考え合わせると、この二つの語は緩やかに連動したものとして読むことが許されよう。

9　ハラウェイは『猿と女とサイボーグ』所収の論文「ポスト近代の身体／生体のバイオポリティクス」で、生物学や医学の各種言説において何が「自己」として構築されていくのか、その力学を克明に分析している（Haraway 1991）。その過程で提示された、不可侵の幻想にとらわれず、截然たる境界をもつのでない、他からの影響を受けやすい半透過性の自己には、死や有限性をめぐる体験を排除することなく生命をイメージしていく可能性の萌芽がある。われわれはこのハラウェイの論考を高群のテキストに接続して、「個体の消滅の未来を約束する恋愛」をめぐる考察を展開させていくことができるに違いない。

10　その意味で本稿は、上野千鶴子が開示している次のような巨大な問い、「ジェンダーを再生産から、そしてセクシュアリティを再生産から切り離す試み」がどちらも成功した後に残る、「ジェンダーとセクシュアリティから離床したあとの再生産と、ジェンダーおよびセクシュアリティとの新しい関係を問う問い」（上野 1998）――異なった視角からではあるが、加藤によって発されていた問いと、ある水準で重なり合うものでもある（加藤 1998）――の一端に、高群逸枝の恋愛論を読むことによってアプローチを試みたものであるといえる。

## 参考文献

Arendt, Hannah. *The Human Condition*. Chicago: University of Chicago Press, 1958.（ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、筑摩書房、1994年。）

Dawkins, Richard. *The Extended Phenotype*. San Francisco: W.H. Freeman, 1982.（リチャード・ドーキンス『延長された表現型』日高敏隆、遠藤彰、遠藤知二訳、紀伊國屋書店、1987年）。

Haraway, Donna. "Investment Strategies for the Evolving Portfolio." In Mary Jacobus, Evelyn Fox Keller and Sally Shuttleworth eds. *Body/Politics*. New York: Routledge, 1990.（ダナ・ハラウェイ「霊長類メス＝進化ポートフォリオの投資戦略」メアリー・ジャコーバス／エヴリン・フォックス・ケラー／サリー・シャトルワース編『ボディー・ポリティクス』田間泰子・美馬達哉・山本祥子監訳、世界思想社、2003年。）

————. *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*. London: Free Association, 1991（ダナ・ハラウェイ『猿と女とサイボーグ』高橋さきの訳、青土社、2000年。）

井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編『女性学事典』岩波書店、2002年。

Margulis, Lynn, and Dorion Sagan. *Origins of Sex*. New York: John Brockman, 1986.（リン・マーグリス／ドリオン・セーガン『性の起源』長野敬・原しげ子・長野久美子訳、青土社、1995年。）

鹿野政直・堀場清子『高群逸枝』朝日新聞社、1977年。

加藤秀一「愛せよ、産めよ、より高き種族のために」大庭健他編『シリーズ　性を問う 3　共同態』専修大学出版局、1997年。

————.『性現象論』勁草書房、1998年。

河野信子『火の国の女・高群逸枝』新評論、1977年。

栗原葉子『伴侶』平凡社、1999年。

真木悠介『自我の起原』岩波書店、1993年。

西川祐子「高群逸枝」鹿野政直編『民間学事典』三省堂、1997年。

高群逸枝［1921a］「日月の上に」橋本憲三編『高群逸枝全集　第八巻　全詩集　日月の上に』理論社、1966年。

————.［1921b］「東京は熱病にかかっている」橋本憲三編『高群逸枝全集　第八巻　全詩集　日月の上に』理論社、1966年。

————.［1925］「放浪者の詩」橋本憲三編『高群逸枝全集　第八巻　全詩集　日月の上に』理論社、1966年。

————.［1926］「恋愛創生」橋本憲三編『高群逸枝全集　第七巻　評論集　恋愛創生』理論社、1967年。

————.［1931］「恋愛と性欲」橋本憲三編『高群逸枝全集　第七巻　評論集　恋愛創生』理論社、1967年。

————.［1948］「恋愛論」橋本憲三編『高群逸枝全集　第六巻　日本婚姻史／恋愛論』理論社、1967年。

竹村和子『愛について』岩波書店、2003年。

田崎英明『ジェンダー／セクシュアリティ』岩波書店、2000年。

寺田操『対なるエロス』砂子屋書房、1983年。

上野千鶴子『発情装置』筑摩書房、1998年。

————.『差異の政治学』岩波書店、2002年。

山下悦子『高群逸枝論』河出書房新社、1988年。

吉澤夏子『女であることの希望』勁草書房、1997年。